

讃岐化学工業

▶ 半導体分野で光彩放つ有機合成のプロ集団

四国のモノづくり力は侮れない。米ボーイング社の省エネ旅客機 B787 の構造材として採用された東レの炭素繊維強化樹脂・CFRP の製造拠点は四国にあり、地場伝統の製紙技術を活用し、車載用樹脂の高強度・軽量化を実現する夢のバイオ素材として脚光を浴びるセルロースナノファイバー (CNF) の実用化を探るのも当地の企業である。その DNA は化学・素材系の中小メーカーにも刻み込まれているのか、オンリーワン、ニッチトップ技術を駆使し成長する実力派ぞろいである。

香川県高松市の讃岐化学工業は、その中小化学のプロ集団の中でも、とりわけ光彩を放っている。「社員 42 人と事業規模は大きくはありませんが、ここ 10 年間で 15 億円を投じて主力拠点の白鳥工場 (東かがわ市) を大幅増強しました。そして昨年、白鳥工場内に実験棟も新設し、今年 9 月、高松本社のリニューアルも完了し



白鳥工場ではプラントの増設が続いている

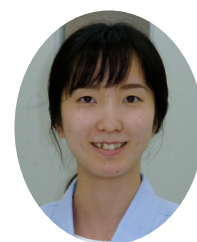
ました。地域の活性化には若い人達が生き甲斐を持ち、安心して働ける職場の提供が不可欠。未来のモノづくりを担う人材を育てていきたいと思っています」。白鳥工場でのインタビューに応じた 3 代目の経営者、杉山雅春社長は、同席した若手社員らを前に目を輝かせた。

創業は 1950 年。70 年近く有機合成一筋に歩んできた同社の現在の主力事業は徹底した高品質・高機能が求められる半導体向け化学品の製造である。電材用途の開発・製造現場の厳しさは経験したものでないと分からないという。その過酷な技術のハードルを「君達を信じ、社運を賭け思い切った投資をする」というトップの強い意思、そして「有機合成のプロの底力を見せてやる」という社員のプライドを原動力に何度も乗り越えてきた。

「スマートフォンの進化などにより必須デバイスである半導体の高機能志向に加速がつき、当社の最近の技術開発は鋭いナイフリッジの上を歩くようなものです。でも、エレクトロニクスの最先端の産業領域に関われることに、

化学屋として、もの凄く生き甲斐を感じますね。白鳥工場の緑あふれる自然環境は抜群。化学の仕事がやりたい U ターンや移住志望の人には魅力がある会社だと思いますよ」。杉山社長と面談した日は青空と白い雲が鮮やかなコントラストを見せ、事務所の応接まで蝉時雨が聞こえてきた。社長の隣りで広報担当の社員は、こういって顔をほころばせた。

同社が現在の電材分野に進出したのは 2000 年代だ。創業当初の農業中間体製造から 1990 年代、医薬中間体に軸足を移したのも、現在の半導体向けに舵を切ったのも、トップの事業と向き合う真摯な姿勢と社員の技術に対する真っ直ぐな眼差しが、いつの時代も揺るがなかったからに違いない。



営業部に配属された新人の田岡さん

化学品の金属不純物を ppb レベルで管理できる体制を整え、有機合成の専門集団の未来の進むべき方向を懸命に模索する讃岐化学。「社員全員の顔が見え、触れ合える温かい会社に入りたいという思いができませんでした」(昨年入社した営業部の田岡さん)。工場棟の上階に上ると陽光煌く瀬戸内の海が輝く。夜は星空がきれいに違いない。一度はこんな会社で働いてみたいものだ。



杉山 雅春 社長